絵図にみる北野社の景観変遷

―北野社参詣曼荼羅の作成年代をめぐって―

岩鼻通明

一　通絵図分析の軌跡と方法

絵図学の体系化を試みる際のブランチのひとつとして、通絵図分析をあげることができる。通絵図分析とは、個別の絵図を現地調査や史料批判を交えて解読していく方法に対して、複数の絵図を比較検討することによって共通項を探り出していこうとする方法である。たとえば、黒田日出男は、絵巻物の分析方法には「単独の絵巻物の分析」、「絵巻物群の分析」、「通絵巻物分析」の三つの方法が存在することを指摘している（黒田日出男編『絵画史料の読み方　朝日百科日本の歴史別冊』朝日新聞社、一九八八年）。

具体例をあげれば、従来の古絵図研究のメインテーマであった地図発達史的研究も複数の古絵図を比較検討して年代比定を行なうという方法論に基づくものであり、広義には通絵図分析に含めることができる（地図発達史的研究もしくは進歩主義的地図史観への批判としては、たとえば堀淳一「「地図論」論」津野梅太郎他『地図の記号論』批評社、一九九〇年、などを参照のこと）。

また、近年、日本中世史の分野で盛んに行なわれ始めた絵巻などを題材とする絵画史料研究もまた、複数の絵画史料から共通する図像を取り出して検討を加えるという立場からして通絵図分析に含められる（黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社、一九八六年、保立道久『中世の愛と従属』平凡社、一九八六年、黒田日出男『〈絵巻〉子どもの登場』河出書房新社、一九八九年、などが代表例としてあげられる）。この立場の先駆的業績として、渋沢敬三他編『絵巻物による日本常民生活絵引』（角川書店、一九六六年、新版は平凡社、一九八四年）をあげることができる。

筆者もまた、社寺参詣曼荼羅に描かれた共通する図像表現を取り出して、若干の比較考察を加える試みを行なったことがある（拙稿「社寺参詣曼荼羅の諸相」難波田徹・岩鼻通明編『神社古図集　続編』臨川書店、一九九〇年）。

ただし、これらの研究は、古文書史料からは明らかにしえない中世の人や物の機能を、それらの図像の絵画表現を通して解明するという要素が強く、絵図そのものの比較検討にまでは及んでいない場合が多い。広義の通絵図分析としたのはそのゆえである。

一方、通絵図分析のもうひとつのアプローチとして、複数の絵図を比較検討することから絵図表現の枠組を模索しようとする、絵図のランガージュ研究が存在する。この研究の事例としては、中世の荘園絵図の空間表現の比較から中世絵図のランガージュを検討した吉田敏弘の一連の研究がみられるが（「中世絵図のランガージュ研究にむけて」水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』大明堂、一九八六年、「四至傍示絵図考」『歴史地理学』一四四、一九八九年）、このアプローチは絵図の表現システム

から中世における空間認識の法則性を見出そうとするものであり、今後の展開が期待される分野である。

さて、本稿で取り上げる題材は、京都洛中の北野社（北野天満宮）を描いた中近世の絵図群である。洛中洛外図をはじめとする近世初期風俗画に北野社近辺の景観はしばしば描かれてきた。近年、洛中洛外図の諸本の検討が進められ、それらの作成年代考証についての論争が行なわれている（今谷明『京都・一五四七年』平凡社、一九八八年、高橋康夫『洛中洛外』平凡社、一九八八年、黒田日出男『謎解き洛中洛外図』岩波新書、一九九六年、京都国立博物館編『洛中洛外図　都の形象―洛中洛外の世界』淡交社、一九九七年）。それらの成果によって、洛中洛外図の諸本の作成年代はおおむね明らかにされてきている。

一方、最近、各方面から注目を集めるようになった社寺参詣曼荼羅の場合は作成年代が不明のものが大部分であり、その考証は十分行なわれてはいない。また、作成年代の考証が行なわれた場合も、その方法はたとえば荘園絵図の作成年代の考証と同様に、関連する古文書史料による検討がほとんどであった（大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年、難波田徹・岩鼻通明編『神社古図集続編』臨川書店、一九九〇年）。それに対し、下坂守は勧進活動と工房という新たな視点から、参詣曼荼羅の作成年代の推定を試みた（『参詣曼荼羅』至文堂、一九九三年）。

しかし、中世末から近世初期に大部分が作成されたと推定されている参詣曼荼羅は、荘園絵図とは異なり、近世初期風俗画などの同時代の絵画史料が数多く存在するのであり、それらとの比較検討が十分可能である。これまでも参詣曼荼羅相互間の比較検討は試みられてきたが（西山克「那智参詣曼荼羅諸本の系統と明星院本」『岡崎市史研究』一〇、一九八八年）、同時代の他のジャンルの絵図や絵画史料との比較はほとんど手が付けられていない状況にとどまっている。

そこで、本稿においては、北野社参詣曼荼羅と北野社を描いた近世初期風俗画などの作成年代の明確な絵画史料とを比較検討することによって、北野社参詣曼荼羅に描かれた北野社の景観年代および作成年代を推定することを試みたい。

筆者はかつて立山曼荼羅の諸本を事例として、それらを作成年代ごとにグルーピングする試みを行なったことがある。その際には、作成年代の判明する数点の立山曼荼羅を軸に、図中に描かれたいくつかの図像表現の変遷を指標として、諸本のおおよその作成年代の推定を試みた（拙稿「立山マンダラ作成年代考」『山岳修験』二、一九八六年）。

絵図に描かれた景観の変遷を辿るという方法は歴史地理学における伝統的研究スタイルに依拠したものであるが、参詣曼荼羅のような従来の古地図研究の範疇には含まれていなかった絵図を対象とする場合には、まずオーソドックスな分析方法をとることによって、絵図学の構築に多少な

りとも寄与するものとなろう。

もちろん、筆者の関心は絵図発達史にあるのではなく、参詣曼荼羅に代表されるような宗教絵図における空間表現の枠組の解明を目指すところにあるが、風俗画などの世俗的な絵図との比較検討を進めることによって、宗教絵図としての特徴が浮き彫りとなる面があると想定される。絵図学の体系化は多角的な分析・読解作業の積み重ねによって進展するものであろう。

二　近世初期風俗画に描かれた北野社

近世初期風俗画とは、洛中洛外図や、遊楽図、祭礼図、歌舞伎図などを含むジャンルを指し（武田恒夫編『近世初期風俗画』至文堂、一九六七年）、これらの中には北野社を図中に描いたものが数多くみられる。ここでは、なるべく年代順に近世初期風俗画に描かれた北野社の景観を検討することによって、その変遷を辿ることを試みたい。

さて、洛中洛外図の遺品は、従来紹介されたものだけでも七十余点を数えるといわれるが、室町時代に作成された初期洛中洛外図はわずかに歴博甲本（かつて三条本ないし町田本と称されたもの－現在は国立歴史民俗博物館蔵）、上杉本（上杉家から一九九〇年に米沢市に寄贈された）、歴博乙本（旧高橋本）の三点が知られるのみである（丸山伸彦「洛中洛外図屏風（歴博乙本）」『歴博』三六、一九八九年）。

まず、これらの室町期の洛中洛外図に表現された北野社の境内について比較検討を加えることとする。なお、これらを含む北野社を描いた絵画史料についての諸本の異同を比較して表にまとめた高橋康夫の研究があるので（『洛中洛外』平凡社、一九八八年）、それを参考としながら以下の検討を進めたい。

最初に、現存する洛中洛外図のうちでは最古とされ、一五三〇年前後の景観を描いたものと推定されている歴博甲本に表現された北野社の景観について検討しよう（図1）。この北野社境内の景観描写については、『洛中洛外図大観』（石田・内藤・森谷監修『洛中洛外図大観　町田家旧蔵本』小学館、一九八七年）において詳細な検討が行なわれている。それによれば、本殿・拝殿（図中の記号A）は南面し権現造で屋根は桧皮葺、蔵（B）は東面し屋根は切妻の板葺、鐘楼（C）は板葺（切妻）、表門（D）は南面し四脚門で桧皮葺、社殿（地主神－E）は南面し切妻の桧皮葺に描かれ、忌明塔（五輪石塔－F）や石鳥居（G）、本殿前の梅樹や背後の十二末社（H）も描かれている。

次に、一五五〇年前後の景観を描いたものとされる上杉本に表現された北野社の景観について同様に検討を続けたい（図2）。これもまた、『洛中洛外図大観』（石田・内藤・森谷監修『洛中洛外図大観　上杉家本』小学館、一九八七年）において詳細な検討が行なわれている。それによれば、本殿・拝殿（A）は南面し権現造で屋根は桧皮葺、

鐘楼（C）は切妻の桧皮葺、社殿（E）は南面し切妻の桧皮葺、表門（D）は南面し四脚門で桧皮葺に描かれている。忌明塔（F）と石鳥居（G）もみえ、輪蔵（I）は宝形造で屋根は桧皮葺に描かれている。上杉本は金雲の占めるスペースが広いため、景観表現は他の諸本に比べると若干少なくなっている。

最後に、やはり一五五〇年前後の景観を描いたものとされる歴博乙本に表現された北野社の景観について検討したい（図3）。この絵図については、『洛中洛外』の巻頭口絵にカラー図版が掲載されている（高橋康夫『洛中洛外』平凡社、一九八八年、巻頭口絵参照）。本殿・拝殿（A）は南面し権現造で屋根は桧皮葺、鐘楼は描かれず、社殿（E）は上部が金雲に隠れ、表門（D）は南面し楼門に描かれている。忌明塔（F）と石鳥居（G）の脇に妻入の桧皮葺の小社（J）が描かれている。輪蔵（I）は表門の左上にみえる。

これら三点の室町時代の北野社の景観を描いた洛中洛外図を比較すると、基本的には共通するところがみられるも

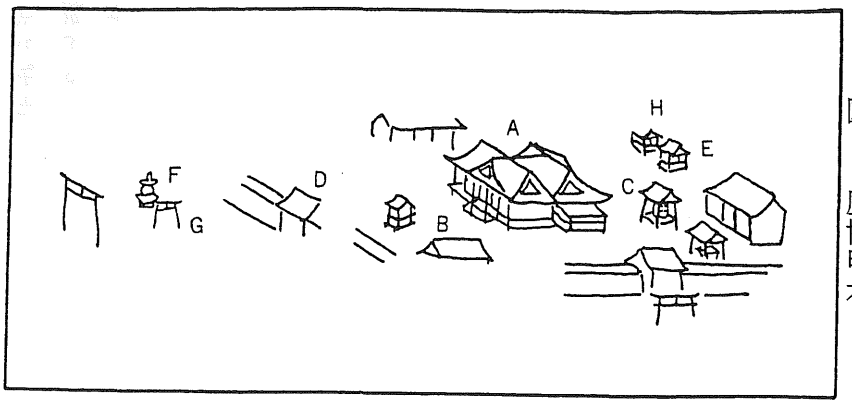

図1　歴博甲本

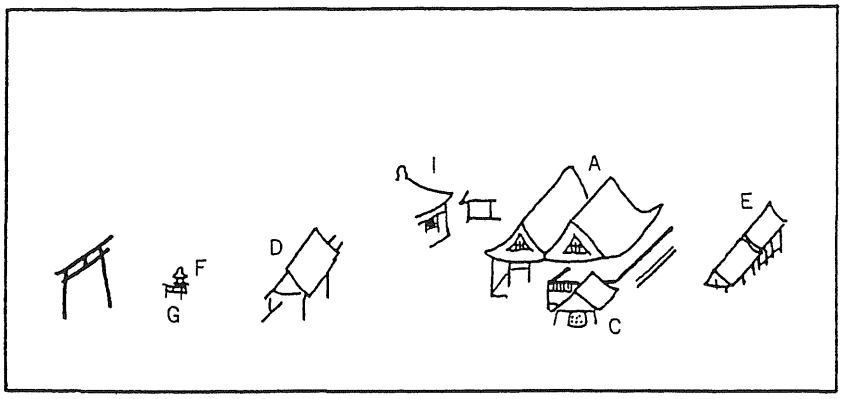

図2　上杉本

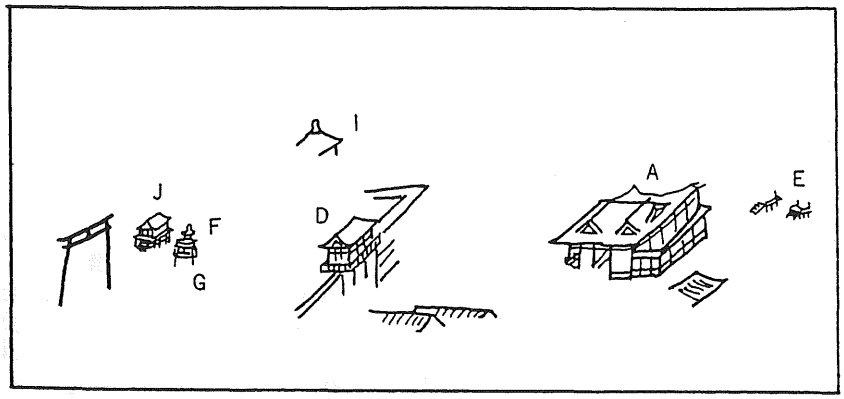

図3　歴博乙本

のの、細部には微妙な相違点が存在し、いずれが正確な北野社の景観であるのかを判断するのはかなり困難である。

たとえば、表門は歴博甲本と上杉本では四脚門であるのに対し、歴博乙本では楼門として描かれている。また、忌明塔も歴博甲本では五輪塔であるのに対し、上杉本と歴博乙本では上部の笠が二重になった石塔として描かれている。

これらは三点のみの比較では不充分なため、さらに同時代の絵画史料との比較検討を進めたい。まず、東京国立博物館蔵の洛中洛外図模本（以下、東博模本と記す）に描かれた北野社について検討したい（図4）。この模本は江戸期の作成であるが、原本は一五四〇年代の景観を描いているとされ、歴博甲本と上杉本の中間に位置する作例とされる（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年）。本殿・拝殿（A）は南面し桧皮葺の権現造で、鐘楼のあたりは雲烟に覆われており、その図像はみえない。表門（D）は南面し四脚門で桧皮葺、忌明塔（F）、石鳥居（G）、輪蔵（I）もみえる。なお、拝殿の前庭に切妻桧皮葺の小祠（K）が描かれており、この表現や蔵（B）の表現は歴博甲本と共通するところがみられる。

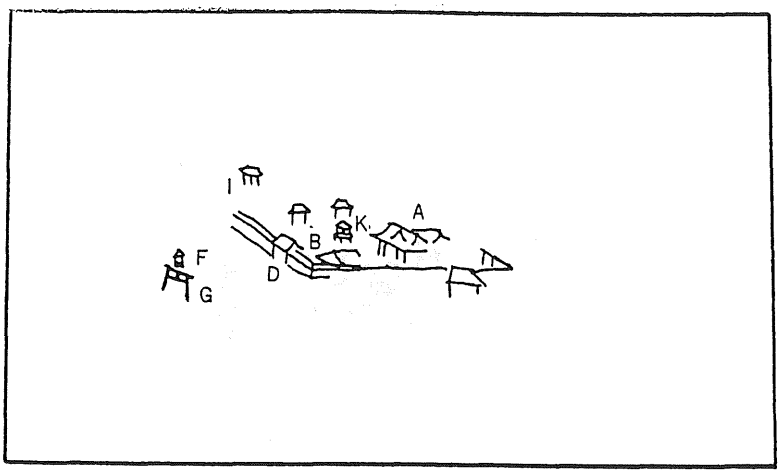

図4　東博模本

次いで、常盤山文庫蔵の北野社境内図について検討したい（図5）。この絵図は狩野松栄（一五一九～九二）の筆とされ、その活躍した時代からして室町末期から桃山前期の作成と推定される（林屋・森谷編『江戸時代図誌　第2巻　京都二』筑摩書房、一九七六年

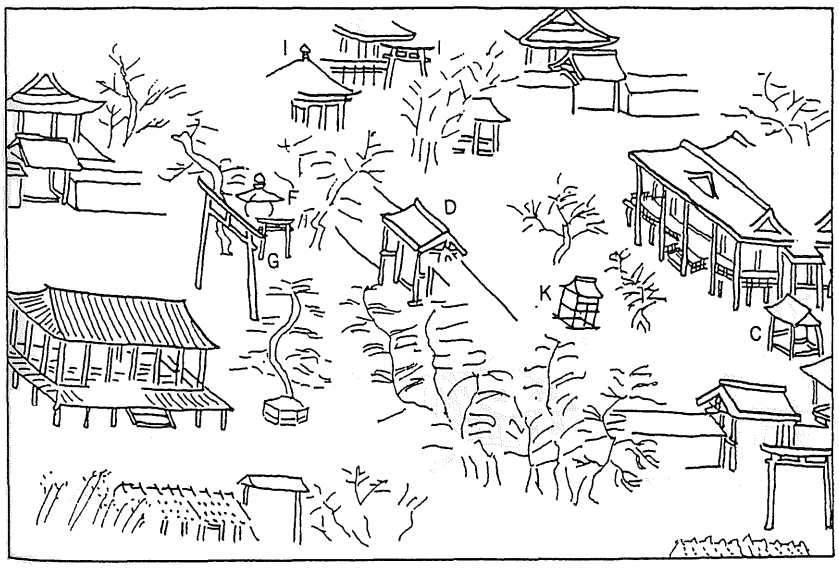

図5　北野社境内図

）。本殿・拝殿は南面し桧皮葺の権現造で、鐘楼（C）は切妻、表門（D）は南面し四脚門で桧皮葺に描かれ、忌明塔（F）、石鳥居（G）、輪蔵（I）、切妻桧皮葺の小祠（K）もみえる。この絵図も歴博甲本および東博模本と共通点が存在する。

さらに、洛中洛外図扇面画帖（個人蔵）に北野社を描いたものが伝えられている（図6）。この図には「元秀」の印がある。これは、狩野宗秀（松栄の子、永徳の弟）が用いたものとされる。景観表現は上杉本とほぼ一致するとみられている（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年）。北野社の景観について検討すると、本殿・拝殿（A）は桧皮葺の権現造で、鐘楼（C）は入母屋造の桧皮葺、表門（D）は四脚門で桧皮葺、本殿の背後の末社（E・H）、拝殿前庭の板葺入母屋造の小祠（K）も描かれている。

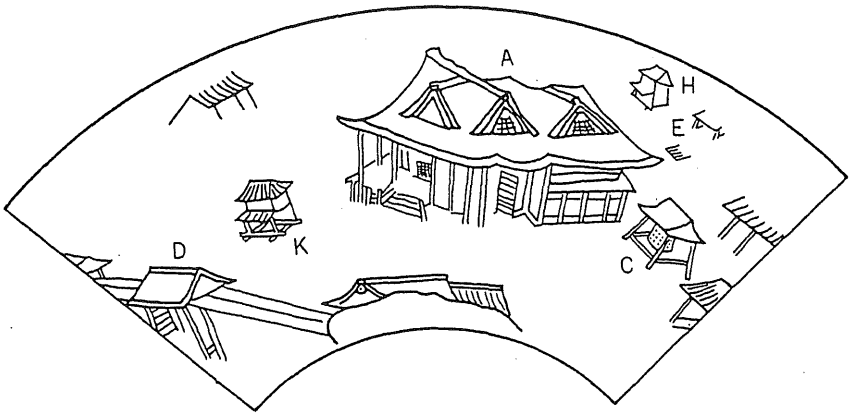

図6　洛中洛外図扇面画帖

この扇面図と類似したものとして、洛中洛外図画帖（個人蔵）がある（図7）。この画帖は、現在行方不明となっている「元信」印のある吉川家本の洛中洛外図帖と描写内容が細部にわたって一致し、その景観年代も上杉本に近いことから、初期洛中洛外図のジャンルに含まれるものとされる（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年）。北野社の景観については、本殿・拝殿（A）は桧皮葺の権現造、表門（D）は四脚門で桧皮葺、蔵（B）、輪蔵（I）、入母屋で桧皮葺の小祠（K）も描かれている。

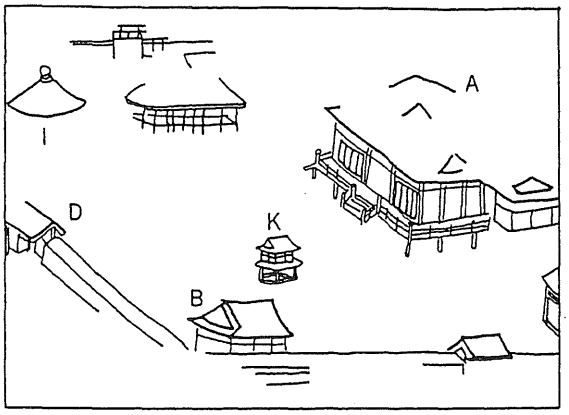

図7　洛中洛外図画帖

以上あわせて七点の北野社を描いた絵図から室町末期の北野社の景観がおおむね明らかにされた。

表門は、歴博乙本以外は四脚門であり、忌明塔も上杉本と歴博乙本以外は五輪塔であって、これらの表現が正しいものと想定される。

ただ、拝殿前庭の小祠のように、桧皮葺か板葺か、切妻造か入母屋造か不明なものも残るため、細部の正確な判断は困難である。

安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、京都の町は急速に大きな変貌を遂げる。豊臣秀吉は一五八六年、聚楽第建設に着手し、一五九一年には京域を囲む御土居と呼ばれる土塁を築造し、京都の街区再編成を行なった。北野社境内の西端に、この御土居が現在も残されている。さらに、秀頼によって方広寺大仏殿や豊国廟の建設が行なわれ、一六〇三年には徳川家康が二条城を建造した。北野社もまた、秀頼の発願で一六〇七年に社殿の大改築が行なわれた。筆者の憶測では、豊臣家と北野社の関係が北野社参詣曼荼羅の成立に大きく関与しているのではなかろうか（京都文化博物館編『秀吉と京都－豊国神社社宝展』豊国神社、一九九八年）。

ただし、秀吉の時代の京都を描いた絵画史料は、わずかに聚楽第図屏風（三井文庫蔵）が存在するに過ぎず、残念ながら洛中洛外図は二条城建造以降の景観を描いたものしか伝来していない（辻惟雄編『洛中洛外図』至文堂、一九七六年）。これら江戸初期の洛中洛外図にみえる北野社の景観について、以下で検討を加えたい。

二条城建造以降の新しい京都の状況を描いた洛中洛外図では、左隻の中央部に大きく二条城が表現される定型が成立し、初期洛中洛外図の定型に対して、この新たな定型は第二定型と称されている。この第二定型の洛中洛外図においては、北野社は二条城の右上のあたりに描かれている。

この第二定型の洛中洛外図の諸本の中で、唯一、秀頼の大改築以前の北野社の景観を描いているのが延命寺本である（図8）。延命寺本は「大坂夏の陣の折り、豊臣方の御座船にあった品」との寺伝があり、慶長期に草創された延命寺にその後まもなく寄進されたものと想像される（武田恒夫編『日本屏風絵集成　第十一巻　風俗画－洛中洛外』講談社、一九七八年）。この延命寺本の景観年代は一六〇六年九月に再建された東寺金堂が描かれていることから、この時期が上限で、北野社が改築される一六〇七年十二月

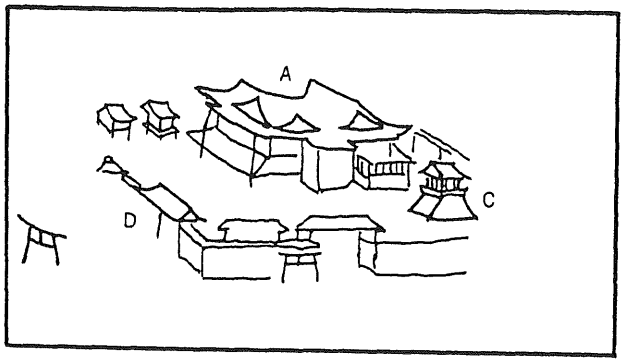

図8　延命寺本

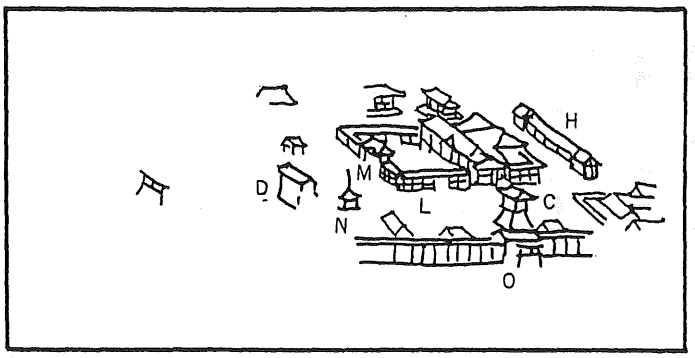

図9　山岡本

が下限になると推定されている（内藤昌「洛中洛外図の景観分析」石田・内藤・森谷監修『洛中洛外図大観　舟木家旧蔵本』小学館、一九八七年）。本殿・拝殿（A）は桧皮葺の権現造、表門（D）は四脚門だが、鐘楼（C）は袴腰の付いた入母屋屋根の楼造に描かれている。石鳥居のあたりは破損が著しく、確認できないが、拝殿の軒先に絵馬が奉納されているのがみえる。

北野社の大改築以降の景観を描いた第二定型の洛中洛外図の代表例とされるのが、山岡家旧蔵A本（以下山岡本と略称）である（図9）。山岡本は左隻にあたる片双しか残されていないが、北野社の大改築直後の一六〇八年頃の作成と推定されている（辻惟雄編『洛中洛外図』至文堂、一九七六年）。山岡本に描かれた北野社の景観をみると、すぐ目に着くのが、大改築によって拝殿の左右に付けられた楽の間と拝殿の前庭を囲む回廊（L）、その正面の三光門（M）である。それ以外にも、東門（O）の脇の鐘楼（C）が袴腰の付いた入母屋屋根の楼造に描かれていたり、表門の右下に多宝塔（N）が描かれているといった初期洛中洛外図とは異なる景観がうかがわれる。本殿の背後には横長に描かれた十二末社（H）もみえる。

この山岡本に表現内容が近似していることから姉妹本と想定される洛中洛外図として、勝興寺本がある（図10）。勝興寺本は一双を完備しており、南御門を持たない内裏が描かれていることから、その景観年代の下限は一六一四年とされる（辻惟雄編『洛中洛外図』至文堂、一九七六年）。勝興寺本にみえる北野社の景観はほとんど山岡本と同様であり、表門は四脚門で、門外には忌明塔（F）と、その脇の小社（J）が描かれている。

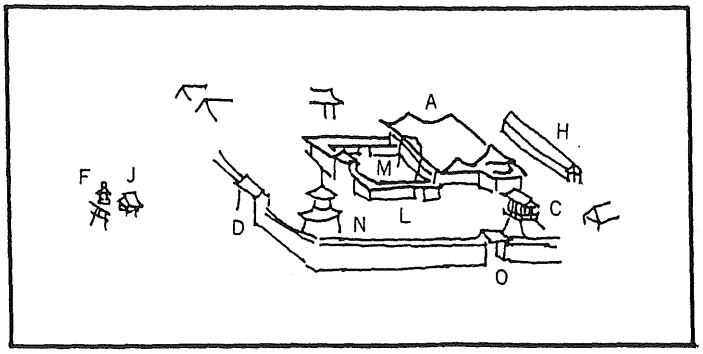

図10　勝興寺本

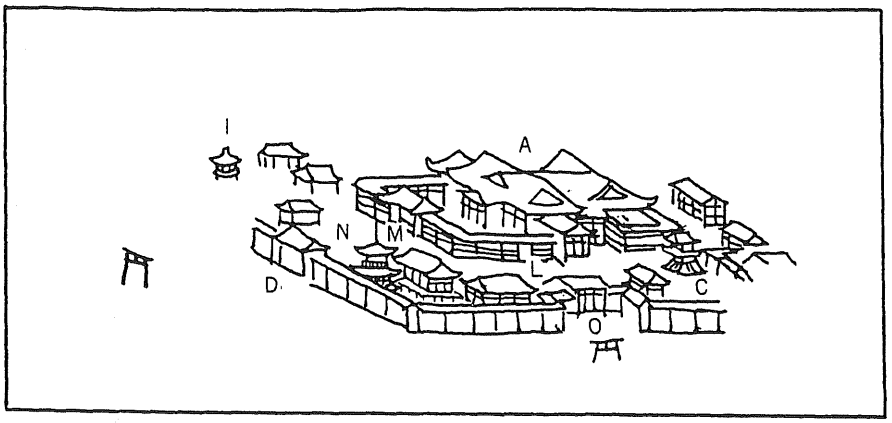

図11　林原美術館本

第二定型を展開させて、民衆的要素の内容とした洛中洛外図に林原美術館本（池田家旧蔵）がある（図11）。林原美術館本では、二条城は縮小されて描かれ、背景の社寺・名所は詳細な描写を回復している。林原美術館本の景観年代は一六一五～一七年頃とされる（辻惟雄編『洛中洛外図』至文堂、一九七六年）。北野社境内の表現も、山岡本・勝興寺本に比べると詳細であり、東門（O）が築地塀から少し内側に引っ込んで描かれていたり、手水舎などの建物が、山岡本・勝興寺本では屋根だけしか描かれていなかったのを、下部まで描き込むといったところがみられる。また、三光門（M）の前には北野社ゆかりの牛の絵馬をかついで奉納しようとする人物の姿もみえる（杉浦康平「天の牛・雷神・斑の力」『太陽スペシャル　天神伝説』平凡社、一九八七年）。

この時代以降の洛中洛外図は次第に表現内容が固定化していく傾向にあるが、北野社の景観を比較的詳細に描いているものとして、次に大阪南蛮美術館B本を取り上げてみたい（図12）。この洛中洛外図は寛永期を中心とする十七世紀前半の作成と想定されており、北野社や豊国廟、方広寺大仏殿、三十三間堂といった豊臣家によって創建・再興された社寺がとりわけ大きく描かれているところに特徴がみられる（武田恒夫「洛中洛外図の行方」『古美術』八八、一九八八年）。北野社の表現は林原美術館本よりも更に詳細な部分もみられ、東門外に小社を描いたり、忌明塔（F）の脇にはふたつの小社（J）がみえ、表門（D）と三光門（M）の間に三基の石灯篭や小祠を描くといった点がみられる。しかし、塔（N）は多宝塔でなく、三重塔として描かれるといった誤りも存在する。

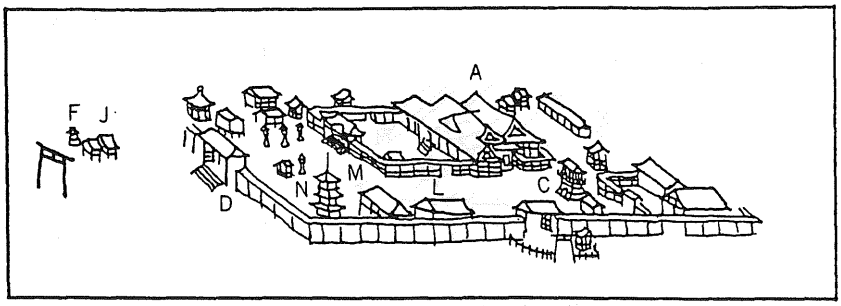

図12　南蛮美術館本

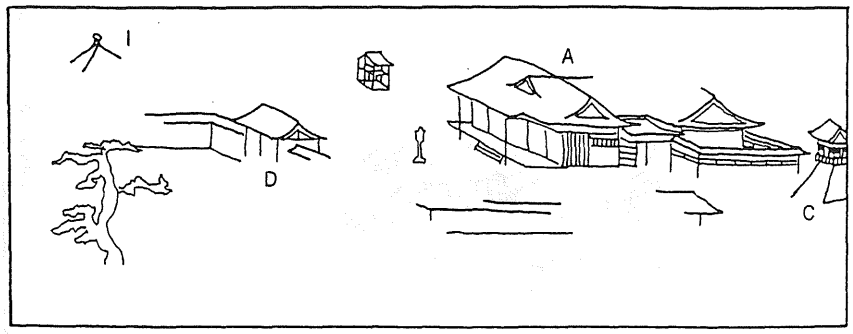

図13　サントリー美術館本

洛中洛外図の表現内容が固定化に向かう一方で、江戸初期には洛中洛外図から特定の部分を抜き出した名所図・遊楽図・祭礼図が成立するに至る。これらの中にも北野社境内を描いた絵図がいくつか存在するため、検討を加えたい。

これらの絵図の中で、唯一、北野社の大改築以前の景観表現のみえるものとして、東山・北野遊楽図（サントリー美術館蔵）がある（図13）。この絵図は、右隻に祇園社と清水寺、左隻に北野社を描く（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年）。本殿・拝殿（A）は南面し権現造で桧皮葺、拝殿の左右の楽の間や回廊はみられないが、右端部の鐘楼（C）は既に袴腰の付いた入母屋屋根の楼造に描かれている。拝殿の前には一基の石灯篭、左上には小祠がみえる。表門（D）は四脚門で桧皮葺、その左上に雲烟から輪蔵（I）の屋根がのぞいている。この絵図に描かれた北野社の景観はほぼ同時期の作成と推定される洛中洛外図の延命寺本に共通する部分がみられる。たとえば、楼造の鐘楼は両者に描かれており、慶長の大改築以前に存在していた可能性がある。

サントリー美術館本に、表現内容が類似しているものとして、東山・北野遊楽図（世尊院蔵）がある（図14）。ただし、この絵図に描かれた北野社の景観は慶長の大改築以降の姿であるとされるが、境内の表現はかなり不正確な部分も多く、サントリー美術館本に若干の手直しを加えたにとどまっている（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年）。たとえば、三光門（M）の配置はサントリー美術館本の表門の位置に近く、世尊院本では、むしろその外側に表門を描き加えた感がある。回廊もサントリー美術館本の築地塀を修正したにとどまって

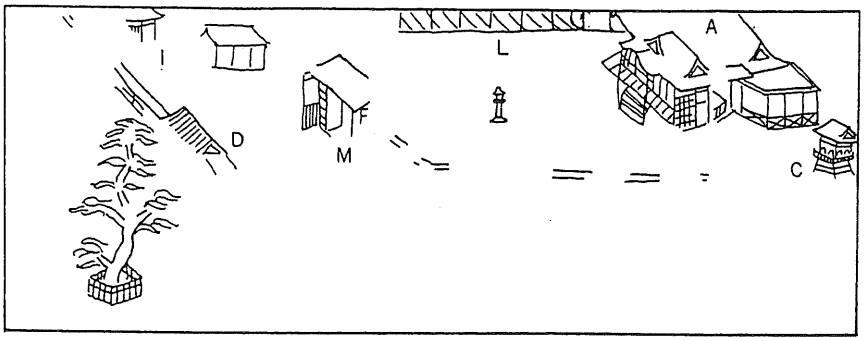

図14　世尊院本

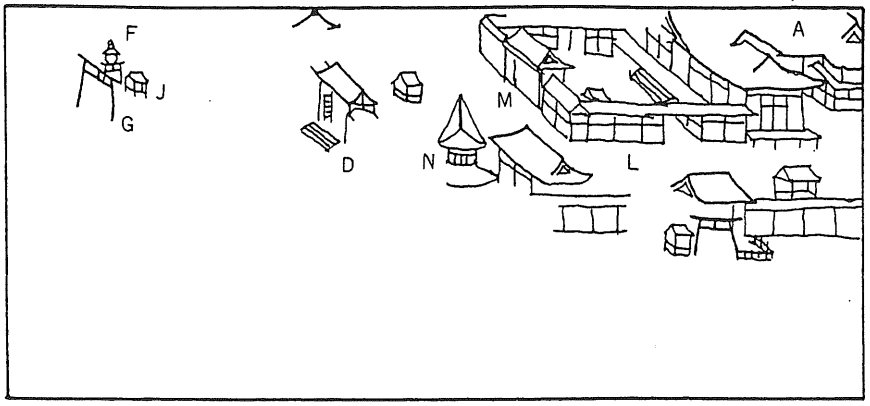

図15　神明社本

いるため、拝殿につながる形では描かれず、拝殿脇の楽の間もみえない。鐘楼（C）や石灯篭の表現もサントリー美術館本とほぼ同様であり、多宝塔が描かれていない点も共通している。したがって、この両者は共通する原本から派生したものとみる観点は的を射たものであろう。

それに対し、北野社の大改築以降の景観をかなり正確に描いている絵図として、北野社頭阿国歌舞伎図（神明社蔵）がある（図15）。この絵図には、前述の第二定型の洛中洛外図にみられるのとほぼ同様の北野社境内の景観が描かれている。図の左三分の一に歌舞伎の場面が表現され、残りの部分に北野社の境内が表現されている（神戸市立博物館編『特別展図録　桃山時代の祭礼と遊楽』一九八六年、難波田徹・岩鼻通明編『神社古図集　続編』臨川書店、一九九〇）。本殿の一部が右端部となっているため、本殿の背後や鐘楼は描かれていないが、拝殿とその前庭を囲む回廊（L）や三光門（M）、多宝塔（N）がみえ、東門外の小社も門の左手に描かれるなど詳細な表現となっている。表門の外には、忌明塔（F）と石鳥居（G）、その脇の小社（J）もみえる。

ここまで検討を続けてきた絵図においては、北野社境内の本殿・拝殿の背後（北側）および西側の部分が雲烟に隠れるなどして表現されていない場合がほとんどであったが、この部分を詳細に描く絵図として、祇園社・北野社図屏風（長円寺蔵）がある（図16）。慶長の大改築以降の北野社境内の景観を描くところは諸本と変わりはないが、本殿・拝殿の西側の部分に数多くの末社が表現されているのが注目される（長円寺本の写真図版は、内藤昌「近世洛中洛外図屏風の景観類型」『国華』九五九、一九七三年、参照）。

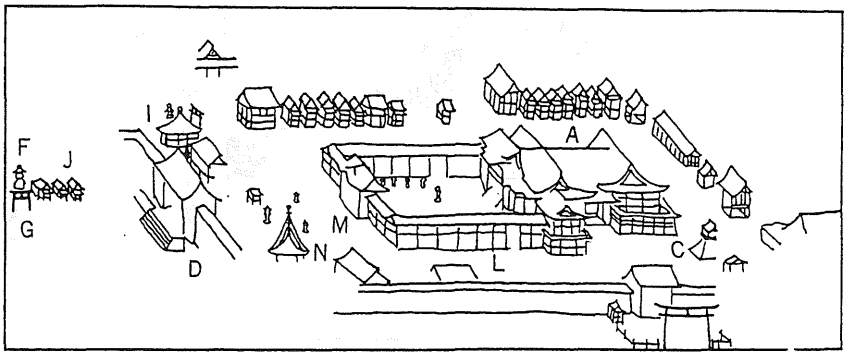

図16　長円寺本

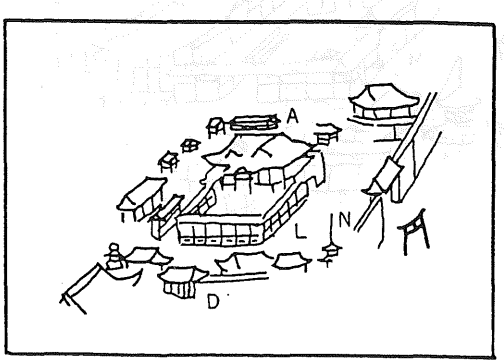

図17　高津文化会館本

洛中洛外図においては、西を上にして北野社を描くのが定型となっているが、定型からはずれて、北を上にして南から俯観した北野社を描いた洛中洛外図に高津文化会館本がある（図17）。この絵図は高瀬川の存在から一六一三年以降の景観を描いたものとされるが、作成年代もそれとさほど隔たらないと想定されている。回廊（L）は描くが、三光門が描かれていないといった誤りもみられるが、境内北側の末社は長円寺本ほど詳細ではないにせよ、いくつかが表現されている。

以上、北野社を描く絵図の諸本の比較検討を試みたが、慶長の大改築以前と以降では、北野社の景観が明確に描き分けられていることが判明した。

三　北野社参詣曼荼羅に描かれた北野社

前章で述べた、近世初期風俗画にみる北野社の景観変遷の検討をふまえた上で、本章では北野社参詣曼荼羅に描かれた北野社境内の景観年代の検討を行ない、併せてその作成年代の推定についても考察を試みたい。

まず、北野社参詣曼荼羅の作成年代についての従来の見解を振り返ると、北野社参詣曼荼羅は、江戸時代後期に編纂された『北野蒿草図書』や『北野拾葉』に「北野曼荼羅」として収録され、竹内秀男は「北野社頭古絵図」として紹介した（『北野天満宮』吉川弘文館、一九六八年）。

しかし、この絵図を社寺参詣曼荼羅のひとつとして位置付けを行なったのは、難波田徹である（「京都の経塚考―北野天満宮境内の経塚」『史迹と美術』五〇三、一九八〇年、「京都府下の参詣曼荼羅図」『文化財報』三四、京都府文化財保護基金、一九八一年、「京の古絵図（社頭図・参詣図）」赤井達郎編『京都千年　二　寺と社―古寺社への道』講談社、一九八四年）。難波田によれば、当時は原本の所在は不明で、一九二一年の写本が北野天満宮に伝えられており、その原本の作成年代については、この絵図はいわゆる宮曼荼羅の系統をひくものであり、室町時代末期の参詣曼荼羅の初期的作例であるとした。

その後、大阪市立博物館での特別展「社寺参詣曼荼羅」に際して、福原敏男によって、北野社参詣曼荼羅の原本が再発見された。この特別展以降、多くの研究者が北野社参詣曼荼羅の原本を実見することによって、北野社参詣曼荼羅をめぐる研究が進展していくことになる。

なお、福原も難波田の見解を踏襲して、原本は絹本であり、富士や熱田社の参詣曼荼羅とともに、初期の作例であるとしている（『特別展目録　社寺参詣曼荼羅』大阪市立博物館、一九八七年、なお、同書には写本の写真が掲載されているが、この写本は早く、奈良国立博物館編『垂迹美術』角川書店、一九六四年、に紹介されている）。近年、西国霊場の参詣曼荼羅の比較調査研究を行なった藤沢隆子もまた、材質が絹本である高野山、北野社、熱田社、富士を早い時期の制作年代と推定している（「三十三所寺院の

参詣曼荼羅の位置」浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版、一九九〇年）。

ところで、筆者は一九九八年三月に北野天満宮において、本絵図を熟覧する機会に恵まれたが、その際に下坂守氏より、本絵図の材質は、目の粗い「室町絹」と称される、戦国時代に典型的に用いられた絹本であるとのご教示を得た。

さらに、中世の文献史料との対応関係から中世後期作成説を積極的に支持するのが、徳田和夫である。徳田は、北野社参詣曼荼羅に描かれた本殿の背後と北側の摂社・末社が立ちならぶ光景が、『北野宮寺縁起取要』（鎌倉末期）の「小神次第」の配列順、および本地仏名の記載と一致するとし、また、一三九七年記、一四八八年写の『神記』の「神変霊応記」「神拝次第」とも対応するとして、中世後期の実際の社頭風景に忠実な絵図であるとしている（『絵語りと物語り』平凡社、一九九〇年）。

ただし、この摂社・末社群の表現について、黒田龍二は、建築学的には屋根形式が入母屋か切妻かは大きな問題で、北野社参詣曼荼羅のたくさんの摂社・末社が、ほとんど入母屋造風に描かれている点は信じ難いと述べている（「床下参籠・床下祭儀」『月刊百科』三〇三、一九八八年）。

さらに、続く論文は、徳田論文への反論としての色彩が強いが、北野社参詣曼荼羅の成立年代についての立場は前稿と変わりない（黒田龍二「図像解釈の位相　北野社参詣曼荼羅をめぐって」『月刊百科』三四八、一九九一年）。

以上の通説に対して、北野社参詣曼荼羅の成立年代について大胆な推論を行なったのが、西山克である。西山は、「二本杉」と「影向の松」という樹木の図像などの検討から、文安元年（一四四四）以前の作成と推定した（「幼童の病いと治癒－『北野曼荼羅』を読む－」『芸能』三四－三、一九九二年）。さらに、西山は、室町将軍足利義持がこの絵図を北野社に奉納したものと推論し、文安元年をさほどさかのぼらない時期の作成であることを補強した（『聖地の創造力－参詣曼荼羅を読む』法蔵館、一九九八年）。

しかし、境内景観が比較可能な同時代の絵画史料に欠け、参詣人物を数多く描いた参詣曼荼羅の形式としてはいかにも早過ぎる時期であることから、境内景観の全体的な比較検討を重視する筆者の立場としては、この西山の推論には賛同しがたい。樹木や人物図像については、特定の歴史上の図像に比定できるかどうか確証がなく、そうであったとしても、伝承的図像の表現が参詣曼荼羅の特徴のひとつである限り、作成年代推定の絶対的な論拠とはなりえない。

なお、西山は、本絵図を垂迹画を踏襲した礼拝画で、参詣曼荼羅の概念で縛ることのできない異質な絵図ととらえているが、筆者は、これまで参詣曼荼羅をなるべく幅広い概念の下に把握しようと考えてきたため（拙稿「社寺参詣曼荼羅の世界1～5」月刊百科三一三、三一六、三一九、三二三、三二五、一九八八～一九八九年）、本稿では従来の呼称にしたがって「北野社参詣曼荼羅」としておきたい。

さて、北野社参詣曼荼羅のトレース図版（図18）が福原敏男によって作成されているので、先述の中世の文献史料との整合性を確認してみたい（大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年）。

『北野宮寺縁起取要』の「小神次第」においては、本地仏の記載を省略して以下に記せば、東端より「三所皇子

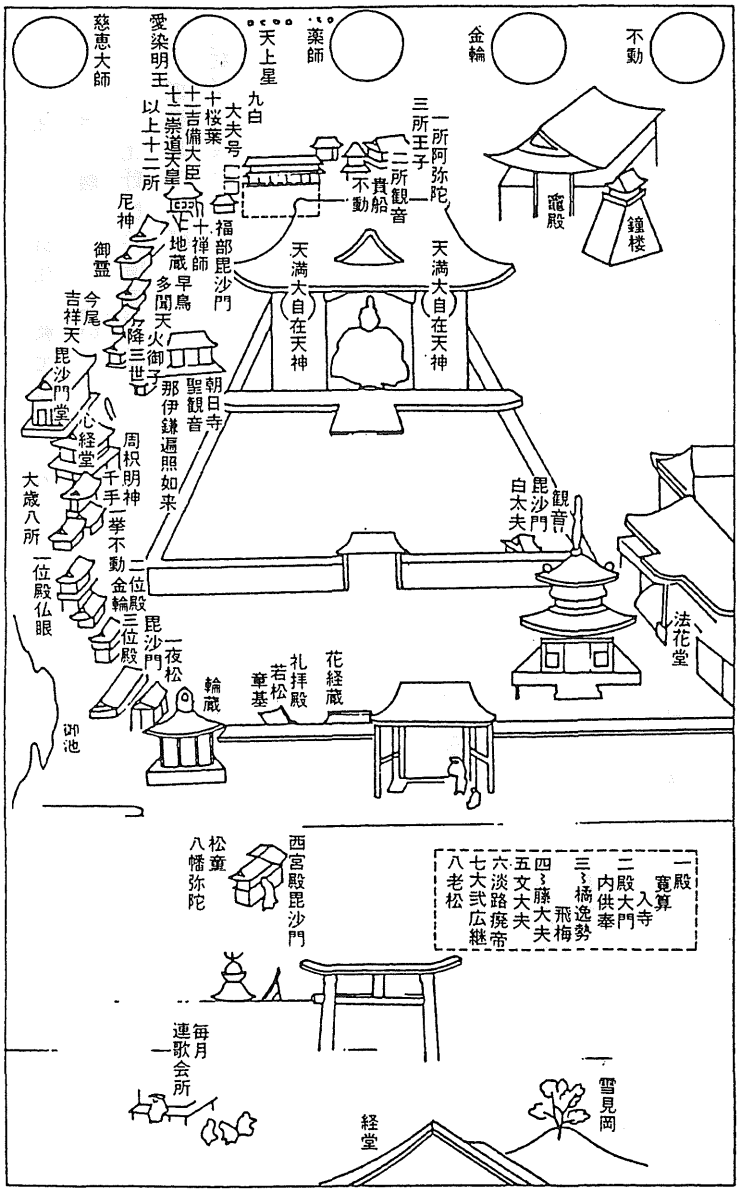

図18　北野社参詣曼荼羅

貴布禰　老松　十二所　福部　十禅師　尼神早鳥　今雄　火御子　朝日寺　那伊鎌　毘沙門堂　一舉　周枳明神　一品社　二品社　小社無名　白大夫殿　松童八幡　夷　三郎殿」の順となっている。なお、「白大夫殿」については「作中門内」、「松童八幡」については「作南門外」との傍書がある（神道大系編纂会編『神道大系　神社編十一　北野』神道大系編纂会、一九七八年）。

次に、『神記』の「神拝次第」は、福原敏男によれば、「三所皇子　貴船　老松　後戸舎利拝　十二所　福部　十禅師　平野　尼神　御霊　早鳥　今雄　火御子　朝日寺　那伊鎌　毘沙門堂　一拳　新経蔵　周枳明神　如法堂　一位殿　従一位殿　三位殿　一夜松　御池　大判事　二本杉　南門外夷　三郎殿　松童　門内御塔　法花堂　白太夫　次庭御所作　金輪北斗」の参拝順路とされる（大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年、ただし注記は省略）。

この両者の順序は完全に同一ではなく、また、一方のみに記載さ

れている神名もみられる。さらに、北野社参詣曼荼羅（図18）に描かれた摂社・末社群の文字注記とも完全に対応するとは言い難い。したがって、先述の黒田龍二の指摘ともあわせ、北野社参詣曼荼羅に描かれた境内の表現が果たして中世後期の実際の社頭風景に忠実な絵図であるかどうかは疑問の余地があろう。

ここで、北野社参詣曼荼羅にみる社頭景観について、前章での検討を振り返ってみよう。近世初期風俗画に描かれた北野社と比較すれば、すでに前稿で指摘したように（難波田徹・岩鼻通明編『神社古図集　続編』臨川書店、一九九〇年）、慶長の大改築以降の北野社の景観と共通する点が多く存在する。

たとえば、回廊と三光門の表現、そして、袴腰付きの入母屋屋根の楼造の鐘楼、表門脇の多宝塔などの描写は先に検討した江戸初期の絵図の表現と共通するものである。従来の説において、室町後期とされていた北野社参詣曼荼羅の作成年代と同時期の絵図においては、前章で検討したように、回廊、三光門、多宝塔の表現はみえず、鐘楼の形式も異なっている。

ただし、この絵図表現の類似性から、ただちに北野社参詣曼荼羅の作成年代を江戸初期とするには問題が残る。それは、先述の「小神次第」には「中門」、「神拝次第」には「門内御塔」といった記載がみえ、中世に中門と塔が存在したことが知られるためである。したがって、可能性としては、北野社参詣曼荼羅は前章で検討した初期洛中洛外図などよりも更に古い時期の景観を描いているとも考えられる。

中世前期の北野社の景観は「北野天神縁起絵巻」の諸本や、十三世紀後半の「隆房卿艶詞絵巻」、「融通念仏縁起絵巻」などに描かれているが、とりわけ詳細に北野社を描いた絵巻として「慕帰絵」巻第六・第一段があげられる（図19）。「慕帰絵」は、一三五一年に成立した浄土真宗本願寺の覚如上人の伝記絵巻であるが、一三二一年に覚如が宿願により法楽のため詩歌を北野聖廟に奉納した場面が描かれている（真保亨編『慕帰絵詞』至文堂、一九八一年）。

ここでは、鳥居から本殿に至るまでの北野社の境内景観が表現されているが、絵巻という制約上、参詣路に沿った建物などが描かれるに留まり、境内絵図のような面的拡がりを有する表現ではないことが惜しまれる。しかし、表現自体は詳細であり、大鳥居の左下には石鳥居（G）と二基の小社（J）が描かれ、さらに進めば四脚門の表門（D）をくぐり、さらに回廊と思わしき廊下を付した中門（M）があり、その奥に拝殿・本殿（A）が鎮座する。拝殿の脇には人々の集う楽の間らしき建物もみえる。面的表現ではないため、中門と楽の間が回廊で繋がれているかどうかは不明である。また、本殿・拝殿の背後の摂社・末社や、多宝塔、鐘楼はみえない。

この「慕帰絵」に描かれた北野社の境内には中門が存在

するなど、先述の中世の文献史料と対応するところがみられる。すなわち、前章で検討した室町後期の初期洛中洛外図に描かれた北野社とは異なる境内の景観が十四世紀には存在していたということになる。

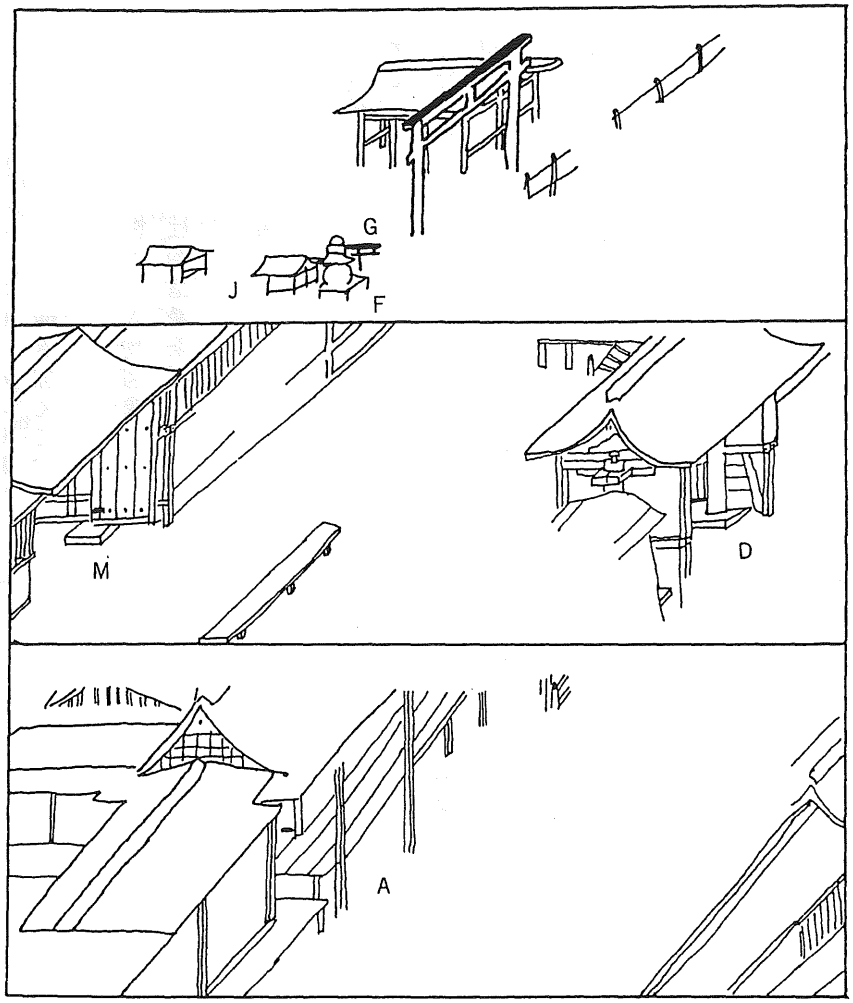

図19　慕帰絵

もっとも、黒田龍二によれば、北野社の現本殿の造立（一六〇七年）までに、九七三年、一二三四年、一四四四年、一四九〇年と五回回禄を繰り返しているとされるため（「北野天満宮本殿と舎利信仰」『日本建築学会論文報告集』三三六、一九八四年）、境内の景観が変化しているのは当然のことといえるのかもしれない。

ただし、福山敏男は、北野縁起によると、九四七年に現在地に始めて社殿を造り、度々改造して九五七年には桧皮葺の「三間三面庇」の神殿を造ったといい、その後まもないころに現在のに近い形に改められたのであろうとし、現在の社殿は、細部の点は別として、大体の形式は古くからのものによったのであるとする（『神社建築の研究』中央公論美術出版、一九八四年）。とすれば、秀頼の大改築は北野社境内を戦乱で荒廃する以前の十四世紀頃の景観に復興することを目指していたのかもしれない。

以上の考察から、北野社参詣曼荼羅の作成年代について、以下のいくつかの可能性が考えられる。

まず、第一に、十四世紀当時の景観を同時代に作成したもの。第二に、復興の勧進のために、十四世紀当時の景観を復元表現して、いわば復興プラン図として室町後期に作成したもの。第三に、慶長の大改築以降の景観を同時代に作成したもの。

第四に、慶長の大改築以降の景観に十四世紀当時の摂社・末社群の復元表現を描き加えて、聖域の理想像を描き出したもの。

第一の可能性は、人物図像の表現や材質の「室町絹」などから、北野社参詣曼荼羅の表現様式は室町後期以降と推定されるため、ほとんど否定されよう。第二の可能性は、参詣曼荼羅の場合、しばしば勧進のために過去の境内景観が復元表現されることが指摘されてはいるが（藤沢隆子「参詣曼荼羅の成立」浅野清編『近畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究』元興寺文化財研究所、一九八五年）、北野社参詣曼荼羅は絹本であり、その用途は庶民への勧進向けの絵図ではないと思われることと、大改築が豊臣家によって行なわれていることをみれば、この可能性も少ないと考えられる。

やはり、慶長の大改築以降の絵画史料との表現の共通部分が多く存在することからも、可能性の高いのは、第三か第四の立場であろう。ただ、この北野社参詣曼荼羅は既に指摘されているように、宮曼荼羅的色彩を有しており、絹本であることからも、礼拝用として使われたものと想定される。そうであるならば、現実の境内景観をくまなく描いた絵図でなく、北野社の聖域空間の理想像を表現した内容でも差し支えがないといえよう。

したがって、基本的には聖域の案内図であるが、作成当時に存在しなかったような過去の景観もしくは伝承的図像（樹木表現など）が一部に混入していたとしても問題はないということになり、むしろ、そのような伝承的表現こそが参詣曼荼羅の空間表現の特徴のひとつであると指摘されてきたのである。

なお、北野社参詣曼荼羅の左上の部分に描かれている土塁らしき表現は、おそらく秀吉の築いた御土居であろうと思われ、そうであるとすれば、江戸初期作成説をバックアップするものとなろう。ちなみに、本絵図より後世のものではあるが、一七〇二年作成の「京都惣曲輪御土居絵図」には、北野社境内に隣接する御土居の景観が描かれている（京都文化博物館編『秀吉と京都－豊国神社社宝展』豊国神社、一九九八年）。

四　おわりに

以上、本稿においては、中近世の絵図にみる北野社境内の景観表現から、その変遷についての比較検討を行ない、北野社参詣曼荼羅の作成年代は、従来の説とは異なり、慶長の大改築以降の可能性が高いことを論証した。ただし、本稿では、北野天満宮伝来の古文書を含めて、中世後期から近世初期にかけての文献史料の検討は行なっていないため、これらについては、今後の課題としたい。

また、個々の絵図を比較すれば、同時代の絵図であっても、細部の表現は必ずしも一致するとは限らず、史料としての信頼性の問題が残るが、本稿で検討したように、同一

対象を表現した数多くの種類の絵図が存在する場合は、それらから抽出される共通項は信頼度がかなり高くなるといってよかろう。

もちろん、絵図と文字史料は相互補完的役割を果たすものではあろうが、参詣曼荼羅と他のジャンルの絵図とを通絵図的に比較検討することによって、従来の見解を再検討すべき場合が存在することの論証を本稿では試みたのである。

なお、北野社参詣曼荼羅以外にも、京の社寺を描いた参詣曼荼羅はいくつか存在するので、同様に近世初期風俗画との通絵図的比較検討を進めることによって、今後解明される部分も出てくることと予想される。

ただ、その際、洛中洛外図などと、参詣曼荼羅の用途の違いには留意すべきであろう。佐々木剛三は、洛中洛外図は社寺曼荼羅の集合体であり、第二定型の洛中洛外図は参詣曼荼羅の影響下に成立したと述べるが（「洛中洛外図と社寺曼荼羅」『古美術』八八、一九八八年）、洛中洛外図は、やはり京の町の風俗を活写したところに意義があり、人物図像がほとんど描かれない中世の宮曼荼羅とは一線を画するものである。

むしろ、洛中洛外図の人物図像が取り入れられて参詣曼荼羅が成立したと考えるべきで、それは、洛中洛外図があくまでも上流社会の絵図であったのに対して、一般的に参詣曼荼羅は庶民レベルでの勧進に使用されたものであり、絵師の点にしても、狩野派本流の絵師が作成にあたった洛中洛外図と、町絵師の工房が大量制作した参詣曼荼羅とでは、どちらにオリジナリティが存在したかは自明のことであろう。

洛中洛外図が京の町を描いた「新図」として関心を集めたのは、それまでの風景画にはみられなかった、京の町の案内図としての性格を兼ね備えていたからであり、それを参考にして、参詣曼荼羅も「聖域の案内図」として確立されたのではなかろうか。

参詣曼荼羅を描いた絵師、あるいは工房の所在はほとんど明らかではないが、近世初期風俗画から参詣曼荼羅が受けた影響はきわめて大きいものがあり、両者の関連性を模索していくことから、この方面の研究が深化されていくことになろう。

最後に、北野社参詣曼荼羅の空間表現の枠組について触れておくと、洛中洛外図や遊楽図といった近世初期風俗画においては、北野社の空間表現は、先述のようにほとんどが東からみた視点で西を上にして描かれている。これは、洛中洛外図の空間表現の定型に由来するものであるが、他の絵図の場合もほとんどがこれを踏襲しているわけである。

ところが、北野社参詣曼荼羅は、北を上にして描かれており、この定型とは異なる空間表現となっている。これは、上部に他界としての山、中央部に社寺の聖域、下部に参詣路を描くという参詣曼荼羅一般に共通する空間表現の枠組

が採用されているためである。

上部の山は、さほどの高山にはみえないことから、北野社の北東にある船岡山と想定される。洛中洛外図にも、しばしば北野社の右手に船岡山が描かれることがある。また、下部に描かれた二頭の馬も参詣路の象徴的表現であろう。このように、北野社参詣曼荼羅は異質の参詣曼荼羅とはいえ、確かに参詣曼荼羅の特徴となるべき要素を内包しているのである。

以上で論じたように、参詣曼荼羅にみられる聖域の空間表現の特徴は、個別の参詣曼荼羅についての関連絵図群との通絵図的研究、および参詣曼荼羅相互の通絵図的比較研究の蓄積によって解明されていくのである。本稿は、とりあえず、その第一歩としたい。

［付記］本稿は、一九九八年六月に大谷大学に於いて開催された日本宗教民俗研究会大会において口頭発表した内容を骨子としたものである。発表時に大森恵子氏より天神像の図像分析から年代比定ができるのではとのご教示をいただいたが、この方法は肖像画研究の分野となり、筆者の歴史地理学的方法論をいささか超えるものであるため、本稿で展開することはできなかったが、北野社参詣曼荼羅の今後の研究課題となるべき面を有している。また、西山克氏からは種々のご批判をいただいたが、北野社参詣曼荼羅の作成動機として、豊臣家のコンテクストを示さない限り、西山説への十分な反論とはなりえないため、豊臣家と北野社との関連を解き明かす作業もまた今後の課題としたい。最後に、北野社参詣曼荼羅の熟覧の機会を与えていただいた北野天満宮禰宜湯浅典男氏、京都国立博物館下坂守氏、國学院大学吉田敏弘氏に感謝申し上げるとともに、絵図学の構築作業を共に模索し続けてきた葛川絵図研究会の会員諸氏に敬意を表したい。

【新刊紹介】岩鼻通明・嶋田忠一編『日本民俗誌集成第三巻　東北編（2）秋田県・山形県』三一書房、一九九八年七月、本体価格二三〇〇〇円。

［秋田県］

『聚楽夜話』　渡辺五郎作

『雪と民俗』　武藤鉄城

『マタギの里』　越前谷武左衛門

『炉ばたものがたり』　打矢義雄

『男鹿風土誌』　吉田三郎

［山形県］

『見たり聞いたり』　高瀬地区連合老友会編

『大井沢中村の民俗』　佐藤義則

『小国の民俗風土記』　奥村幸雄

『荒沢の民俗』　庄内民俗学会

以上の民俗誌を復刻して収録し、巻末に解題・解説（民俗誌論）・民俗誌文献目録を付す。